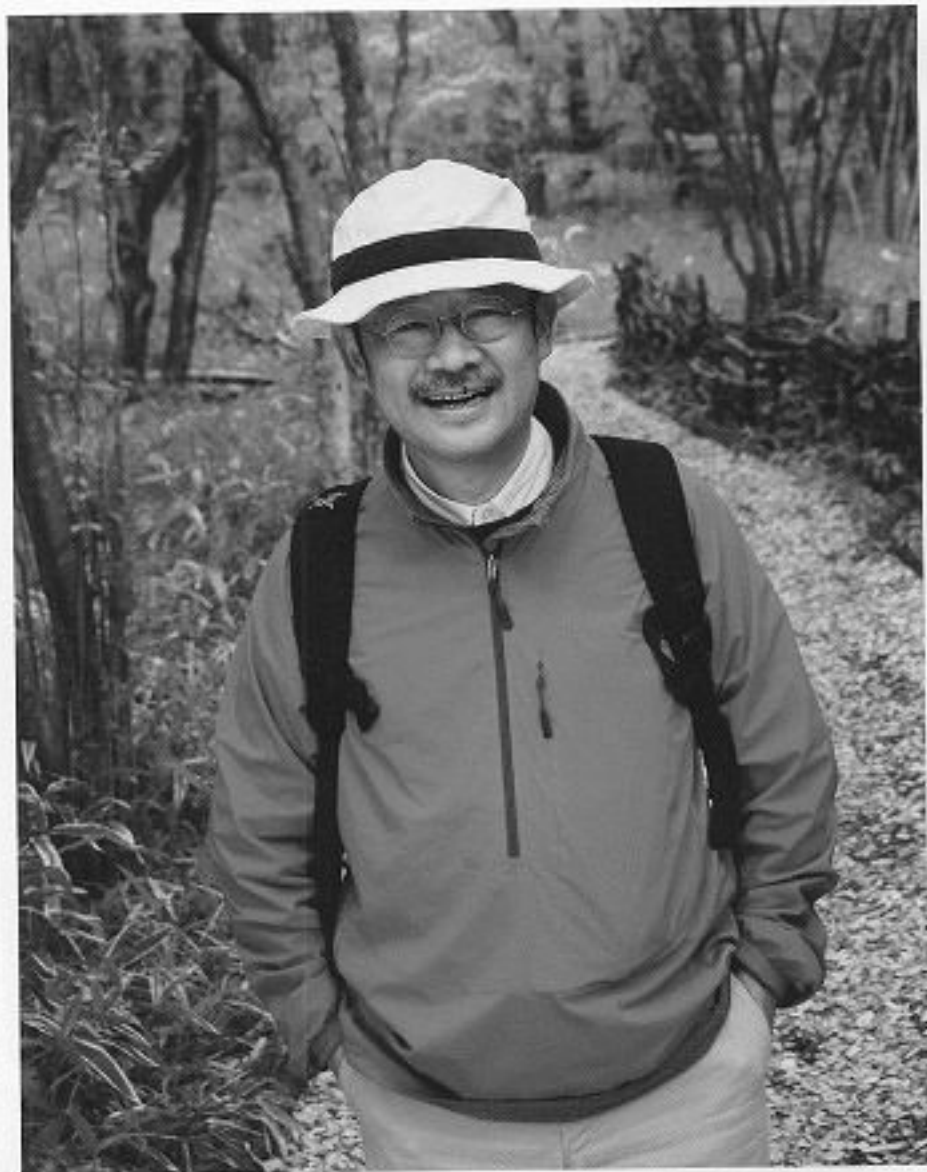


↓「Look」↓「Think」
↓「Grow」という学びのサイクルをベースに、組み立てられています

「Do」は、文字通り体験。「Look」は「いま自分が体験したこと」を一人でじっくりと見つめる時間。「Think」は、それを分かち合い、考える時間。同じ体験をしても、みんな同じことを同じように思うわけではない。話し合うことでそれを知るのである。そして「Grow」は、「次に利用できるような公式を見いだす」過程だ。

「こうした学びのプロセス作りは、意外と世の中では一般的じゃないんですね。いつのまにか体験させるだけか、公式を教えるだけになってしまふ。「Do」だけでぐるぐる回っているのを、僕は「D.O.D.めぐり」と呼んでいます（笑）。体験しただけでは、もったいないですね。例えば種刈りをして、そこから何を学ぶか。体験と同じだけの時間を「Look」や「Think」、「Grow」に充ててもいいはずだと思います」

ここ数年は、企業との協働プログラムや、「企業人のための……」と銘打ったプログラムも盛んに行うようになった。例えば、企業がスポンサーとなって、



子どもたちに自然体験プログラムを提供するという形だ。最近では、スポンサー企業の社員がボランティアスタッフとして自然体験の場に参加するケースが増えている。となれば、結果として、その社員への環境教育にもなる。

環境マネジメントに関する国際規格である「ISO14000

1」に社員への環境教育がうたわれ、CSR（企業の社会的責任）も大きな注目を集めている。

環境教育という言葉がほとんど知られていなかった時代から、かつては自然保護とは対極にあると思われていた企業と協働する時代まで。バイオニアの川嶋さんだからこその見えてきた、環境教育をめぐる社会の変遷だ。次

に川嶋さんが描くのはどのような世界なのだろう。

「僕が年をとったら、孫に『おじいちゃん環境教育という自然と人の橋渡しをするような仕事をしていたんだよ』と説明して、『へえ、昔はそんなおせっかいな仕事があったんだ』と呆れてもらえるような、そんな時代が来てほしいですね」

環境問題への関心から、自然との付き合い方を考え直す人が増えてきた今、全国各地で開かれるようになった「自然学校」に参加する人も増えてきた。そのさきがけとして、清里の森をベースに、自然を学び、考える場を一から作り上げてきた川嶋直さん。二十数年の経験で得られた環境教育のポイントを聞いてみた。

Close up 39

取材・文 江口 絵理
撮影 加藤 品人